
蒼と朱と外れた歯車

白黒犯駄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼と朱と外れた歯車

【Nコード】

N1576BA

【作者名】

白黒犯駄

【あらすじ】

さて諸君、人と人外は『恋』をするものだろうか。

どれほど終わった世界であっても『恋』は出来るのだろうか。

そもそも『恋』とはなんだろうか。

『恋』は『愛』より浅いかもれないが、かなりの深さがある。そう私は思う。

舞台は中途半端に終わってしまった世界。

季節は冬。

ところは白い壁に囲まれた廃墟。と化してる都市。

そこで少女と少年は出会う。

初めて知らない人を見た少女と記憶が欠落している少年。
さてさて、少年少女の初恋は如何に！？

基本SF、時々恋、後シリアス。

プロローグ

世界では毎日、新しい理論が生み出され、証明されている
これは、そのうちの1つ。

《世界は観測されるが故、存在出来る。故、観測者は世界を書き
換えることが出来る》

こう考えた天才が2人もいた。
これはもつとも愚かな理論である。かもしれない。
これが世界の真理である。かもしれない。
彼らは

思案し、心酔し、狂信し。

天才であつたが故、立証してしまった。
天才であつたが故、愚かだったから。

さて、実装に移そう。
足りない物は、世界の歯車を狂わせるモノ。
タダそれだけだ。

世界をより良く変えることが出来る。
そう思案し、心酔し、狂信し。

1人は世界を狂わせるための歯車を作った。愛のために。
歯車となる紅い少女を作った。
全てを狂わせる赤を。
最悪の朱を。

もう一人は抑止力を作った。友情のために。
理論上は完璧な抑止力を作った。
狂いすぎないように。

その2人の行動により

世界は、

狂いに狂い、

狂うことに狂い、

狂わないことに狂った。

手の追える訳がなく、

手の施しようもなく、

多くの矛盾を抱え、

より加速続き狂い、

突然終わった。

そんな中途半端に終わってしまった世界での物語

プロローグ（後書き）

この年になって初めて、小説のようなものを書きました。

さて、私は何歳でしょうか。

まるで老後の人のような受け方をしませんでしたか？

ホント、言葉遊びは楽しいですね。

では、このへんで。

感想などありましたら、どうか、お願いします。

何分、初めてなもので……友達もいないし。

いや、いるけどなっ！

いやいや、いるからな（笑）

いやいやいや、ちゃんと、いるよ……。

初期微動

この物語の主人公の『少年』は、少年、という表現が最も相応しい容姿、性質、人格の少年だ。

他の表現に違和感を感じざるを得ないほどに少年である。

この少年は、初めから『人』ではなかった。

これっぽちも。欠片も。

絶对的に。絶望的に。

『人』では無かった。

少年の本名は——おっと、語るまい、語れまい。
理由。

少年法だとか情報規制だとかプライバシーだとか、よく解らない
柵があるから。

などと単純な理由ではない。

決してない。け、決してないからなっ！（男のツンデレはどうなのだろうか）

ただ、物語の中で一度も使われないから。

必要ないからという単純明快な理由である。

だが、敢えてこの少年の本名を言うなれば——

普通で、普遍で、平均。

かつ。

もつとも主人公に相応しくない。

世界の齒車として生まれてきたかのような名前であった。

つまりは、『山田 太郎』などという名前ではない。ということだ。

ちなみに、2011年の資料によると一番多い苗字は『佐藤』だそうだが。

ふむ、知り合いに『佐藤』さんは、いないのだから。やはり、世の中は『嘘つき』ばかりだ。

さて、話を戻そう。

と言いつつ、いきなり話を反らそう。それが私のアイデンティティ。（友達によく怒られる）

『人』という物はどういうものか。

という議題を読者の皆様に吹っ掛けよう。唐突にだが。

まず、最低条件として『ヒト』という器と形を持つ。ということ。これに他言はあるまい。

では、他の条件を思考しよう。

まず、コミュニケーションを行えるということだ。

人同士で行える必要はない。

必要条件に加えるならば『人間』になってしまう。

どうだろう、イメージとして固まってきたであろうか。

これ以上続けるのはやめよう。

簡単に本を一冊は書いてしまう文量であるから、結論だけ言おう。詰まるところ。

つまりは、

『人』は、人しく、人をし、人らしく、人せねばならない。

ということだ。

ふむ、『意味が解らない』だと？

問題ない。作者本人もわからないのだからな。

つまりは。

彼は『人』では無いのだ。

天と地が引つくり帰らない限りはな。

初期回転

季節、冬。

天候、晴れ。

風速 1.6 m/s

比較的穏やかな天気である。

所、とある廃墟。

海と白い壁で囲まれ孤立したこの場所は、人の住んでいる場所など一部なのだから、どこも廃墟なのだが。

ただ、自然はほぼ無く、コンクリートで整備されてしまった地面や壁の荒んだ色ばかりである。

紅い眼の少女が立っていた。顔にも体にも至る部分に至るところにまだ幼さを残している。髪は長く、深淵のようにどこまでも黒い。服装は、黒一色のパーカーが、なんとも似合っている。

「やっとだよ……。これでやっと帰れる。」

彩華は、つい、そう呟いてしまった。

目線の先には、所謂、グリフォン（上半身は鷹、下半身は獅子で、翼の色は黒だが全体の色は青白、体長は約二・五メートル）と呼ばれる生物が首、4本の足、翼までもが見事に切り離され、肉塊と化していた。辺には血の鉄臭い匂いが充満している。

「これで生きているとか言ったら困っちゃうよ?」

自嘲気味に言いながら、手に握っていたセラミック刀で頭部をつ

ついてみる。

動かない、生きている気配もない。
—安心といったところか。

「よし、死んでる！よかった……。」

胴体の近くに引き摺ろうかとした。

だが、いきなり閉じていた眼が見開く。

思わず声を出してしまう。ほど驚いてしまった。

だが、口が動いていないことを確認する。

よって、『気のせいだ』と信じ込み、作業に移る。

「大丈夫、大丈夫だから。

何も見てない、何も見てないから。

眼がいきなり開いてなんか無いから。

流石に口だけ飛びかかってきたりしないでしょ？

しないよね？

しない。しないって。

生首が跳んでくるとか、マジで有り得ないから。」

この後はお約束通り、鳥の生首が鋭い嘴を大きく広げながら跳んできて、悲鳴をあげながら真二つにした。までは良いのだが、全身に返り血を浴びるのである。

それにしても。

それにしてもだが、全身がズブ濡れになった女の子というものは、どうしてこう、エロスを感じるものなのでしょうか。『水がしたたるイイ女』という言葉があるように、素晴らしい。この一言に尽きると思います。全く、読者の皆様も同感のことでしょう。

ですが。非常に残念ですが。

非常に長くなりますので割愛させていただきます。（文量が1万

字くらいになつたので)

「もお~~~~~さいっあくっ!!
気持ち悪いよお~~~~~」

一人であるのに淡々と誰かに愚痴を綴る。

度々あることではあるが、全身がベトベトになることには慣れないようだ。

散々毒を吐きと八つ当たりで疲れたか、もう諦めが付いたのか、後始末に入るようだ。

四肢と半分に分かれた頭部を胴の周りに集め、先ほど浴びた血で、食み出ないように円で囲む。

手で肉塊をポイントしながら、こう呟く。ただ淡々と。

「座標指定 1 5 4 3 7 , 5 4 . 5 , 9 6 . 2 , 4」

「座標固定」

血の円が、鮮明に紅く色付く。

「座標リンク」

より鮮明に紅く色付く。

「転送」

円と内部にあった肉塊が喪失した。

こうして彼女の仕事は終わった。
終わった——からといってすぐに戻るわけではない。

帰るはずが無いではないかつ！！

帰れば、次のことを何か言われるに決まっている。

よって、お気に入りの場所で時間を潰すのに限るのだ。

お気に入りの場所の一つ。

蒼い海に太陽が沈む光景を何の障害も受けずに見渡せる場所。

風化が進み、原型をほぼ留めてはいないが、当時はこの一帯で一番高かった建物らしい。

ほんの気まぐれだが、今日はそこに向かうことにしよう。

そう彼女は思い、目的地に向かったのだが――

この後、傷だらけの少年を見つけることになるとは予想だにできなかったであろう。

なんせ、彼女は、知らない人を知らないのだから。（知っていても予想だにしないけどな）

前転齒車

俺は、人が嫌いだ。

間違えた。人自体は嫌いでは無い。

間違えないでくれ。何をどう間違えたのか、分からないが。本当は分かるのだが。

人は好きだ。愛している。無論、人並にだが。

おっと、集会の開始時間だ。

カリスマを感じさせる初老を迎える前ごろの男が話をし始めた。噂だが、あくまで噂だが。

かなり体臭がキツく、本人のコンプレックスらしい。だからなのか、かなりコロナ臭い。（気がする）

丁度、丁度良い例が、きっと今から始まる。嫌いのオンパレードがな。

「次の作戦の内容を説明する。先日的事件を覚えているはずだが。作戦の行動中だった部隊の隊員六名が殺害された件だ。」

これを読むだけでよく現れている。

『ある作戦』だとか言つて、何も教えてくれない。

にもかかわらず、「給料の分だけ働け」と要求してくる。それにだ。

『情報が漏れないようにするため』だとか理由を勝手に付ける。それを盾にして、組織がどんな作戦を実行しているかを詳しく教えてくれない。

「まず、事件の真相について話せねばなるまい。」

教えてくれるのか？

教えてもらえるのか！

何やら、罪悪感らしきものがあるが。

気のせい、ということにしておこう。

気のせいに違いない。

気のせいである。

気のせいなのだ。

それが大人の対応というものだ。（悪い大人の対応ですね）

「表向き——と言ふべきところだが、

その件に関して、諸君らも上層部が隠し事をしていることぐらいは察していることとは思ふ。」

あれだけ不自然なら当然だ。

分かっていない奴なんて——いたわ、隣に。

こいつ、絶対に何も考えていなかった。口が半開きになってやがる。

「あの事件、また『連中』が関わっている。」

あ、口閉じた。目に生気が戻った。

物凄く目が輝いでるように見えるのだが。

なんでこんな馬鹿が、なんでこんな単純バカが、なんでこんな戦闘狂が。

なんでこんな奴が——俺の、友と呼べるのだろうか。

合理的ではない。客観的でもない。理論的でもない。

だが、主観的。感情的。倫理的。常識的に。

俺とこいつは、友達、いや、親友、というモノなのだろう。
そいつがどんな奴であれ、大切にせねばならない。
友こそ宝だから。

「諸君らには、壁の向こうに行ってもらう。」

会議が終わり。

友「おい親友。」

俺「なんだ、腐れ縁。」

友「俺、無事帰還したら恋人に告白するんだ……………」

「

俺「おお、お前そんな人いたのかっ！

おいおい、誰なんだ……………」

友「お前。」

俺「……………え？」（今違えた？）

友「冗談だよ。本気にするなって。冗談だから……………」
……………」

これが俺の記憶で一番最後の事らしい。

これでお分かりだろう。

これがwhy.

『なぜ』、壁のこちら側にいたか。という答えだ。

俺の記憶では、そうなっている。
所詮、俺の記憶ではだが。

前転歯車（後書き）

感想募集中

友達募集中

そして彼女ばs・・・ゲブンゲブン

一回転目

彩華は鼻歌を歌いながら気に入りの場所に向かっていた。
海が近くなってきたからか、塩の臭いが香り、どこことなく波の音が聞こえる。

次の角を右に曲がれば場所まで一直線だ。
いつも通り、気楽に曲がる。

いつも通り、大きな建物が見える。
ここまではいつもどおりの光景。
ただ違っていたのは。

数メートル先に人の形をした物体が壁に腰をかけていた。という点。

鉄の匂いがする。おそらく血の臭い。

遠目から見ると、多分男。（胸が無く、輪郭がゴツゴツしていたから）

無論、彩華は

驚いた。というより混乱した。

混乱した。というより驚いていた。

といった状況。（料理中にゴキブリが目の前を通った時の気持ち。

）

知らないモノ＋人っぽいモノ

この組み合わせに出会ったことがなかったから。

さて、少し注釈。

ここは閉鎖的な空間である。

知らない人など存在するはずがない。

範囲が一都市分しかないこの空間では、知らないものなど海からの漂流物にたまにあるくらいである。

知らないものがあるほうが珍しい。

さて、どうするべきか。悩む。

ざっと選択肢として6通り。

- 1、見なかったことにして先に進む
- 2、見たことにして先に進む
- 3、迂回して先に進む
- 4、つついてみる
- 5、引き返す
- 6、取り敢えず解体^{バラ}してみる

彼女好みの選択肢としては、1か4か6。

しばらく悩んだ結果。

最善と思われる手順はこうだ。と判断した。

- 1、つついてみる
- 2、動くなら解体^{バラ}みる
- 3、先に進む

うん、完璧だ。

好奇心を満たせ、危険を回避でき、時間も潰せる。

どこに不具合が有ろうか。いや有るはずが無い。

では1から始めよう。

手するのも汚れるから嫌だ。
ので、セラミック刀でつついてみた。

「う、うう……」

声がした。

よし、バラしてみよう!!! Let's try!!!!!!

さっき殺つたのは四肢をバラしても生きていたので頭に一撃加えて止めを刺しておこう。

あれを一日に2度経験するのはどうしても避けたい。

（ゴキブリが飛んで向かってくるのを2度も体験したくないだろ？あの気持ちさ。多分）

そつ心に決め解体バラそうとしたのだが……。

「……あ、あの。ここは、どこですか？」

などとしやべるものだから手を止めてしまった。
どうしょ。

お兄ちゃん達だと即解体バラすよね、多分。

「怪我をしております……出来れば治療……のようなことを
して頂けたら助かるのですが」

治療？なにそれ？おいしいの？

「えっと……私わたし……壁の向こう……からきたのですが……」

え？壁の向こう？

壁の向こうか

「・・・言葉・・・わかってますか？」

「は、はい！わかるよっ！」

さて、どうしょ。

「あの・・・取り敢えず、他の人のいるところに連れて行って貰えたら助かるのですが・・・」

「うん！ 分かったっ！」

べ、別にっ！

好奇心に負けたとか、そんなのじゃないんだからねっ！

みんなが倒れていたら同じことをしたと思うから。それだけなんだからねっ！

よく見ると、目が蒼い以外お兄ちゃん達と変わらないようだ。

傷のせいで体が動かなくなってしまうているらしい。

なんで自分で塞げないのか分からない。自分で塞げばいいのにね。けれど、お兄ちゃん達の力がある。というのは事実のようだ。

さっきから口以外ほとんど動いていないし、なんだか苦しそうだ。

しょうがない。

サボりは中止して、『これ』を持って帰る。

一回転目（後書き）

もつすぐ起承転結の『起』終わりですよ

フラグ立てまくったはいいいけど回収できるかね・・・。

死期澆刺

鼻への刺激のせいで目が覚めた。

身体を見ると至るところに傷があり、血が流れている。

斬られたらしい傷に痛みがない。

意識が朦朧とはする

だが、ブラックアウトまでは逝きそうにない。

覚まさせた刺激は刀によるモノだったらしい。

目の前に刃があることには驚いたが、刃物を向けられているという恐怖のほうを上回っている。

前にいる紅い眼の少女が明らかに殺気を立たてている上、こちらが話しても反応がない。

当たり障りのない言葉を……。

例えば、場所とか。

ヤバい、無反応。

他のことを……………。

ダメだ。

数言葉話したが、反応がない。

まさか、言葉が通じていない。なんてことはないだろう。いや先入観は良くないか。

うん、通じていた。

ていうか、普通に普通の返事が返ってきた。

驚いていたってことか。

彼女には悪いが、頼りになりそうにない。

それに冷静な判断が出来ないのは困る。

なんせ治療だからな。悪化してそのまま最期を迎えるなんてことだけは避けたい。

彼女の様子からして。

いきなりザツクリ・・・なんてことは無いだろうから。

他の人と呼んでもらうしかないか・・・。

いや、いやいやいやいや、待て待て、俺。

『連れて行つて』と言えば『おんぶ』もしくは『お姫様抱っこ』に有りつけるのではないかっ！！！！

女の子の香りを短に感じつつ、治療をしてもらえる環境にも有りつける。

クハハハハハ…………

我ながら頭が冴えている。ボロボロだけとなっ。てか死にそうだけとなっ！

世の中、甘くない。

結果として、服の首の後ろを掴みながら引きずられ連れて行かれるのである。（ざまあみろ）

これにより少年は完全に意識を失った。

死期澆刺（後書き）

邪な心って良くないですよね

本心

他人の幸福には天誅を・・・

体裁死守

うつすらと意識が覚醒する。

「ここは・・・？」

白い。

天井か。

白い天井。

カーテン。

病院の匂い。

いや、消毒液の臭いか。

どこか、中学校の保健室を連想させる。

そうだ、傷・・・

どうやら痛まないようだ。

手足を少し動かしてみたが支障がない。

体の方の傷はどうなったのだろうか。

見たら着ていた服ではない。

いふなれば・・・

そう、パジャマに着替えさせられている。

前時代のパジャマ。

少年の脳内に疑問が走る。

走りすぎる。

故にショートし、思考をやめる。

心を無にし、ただ何もないカーテンの一点を見つめ続ける。

そうすることで、ありとあらゆる現実から逃避し、ことが起こるまで待つ。

という一般的な対応。

なんせ、己には状況が解らないのだから。

いくらか時間が経ったのだろうか。

突然、それはもう唐突に。

カーテンが視界から消え、

「お目覚めですか？」

と聞かれた。

男に。

なんというか。

物凄く、アニメで出てくるメガネをかけた白衣の女性にしか聞こえない声で。

男の容姿を説明することは至って簡単だ。

大肉中背、顔にソバカス、頭にバンダナ、メガネ。

どうしてリュックを背負ってないの？と疑問に思えてしまう体型。そして顔。見た目。

全てが前時代の「ヲタク」と呼ばれた種族を示す容姿と同じであった。

今や、資料でしか見ることができない。

というより、当時ですら、現実にはどうか解らない。

都市伝説、いや、ある意味、神話に近い存在であった。と言われている。

率直に感想を言うならば、『だれ？』の一点に集約されるであろうことは間違いない。

知らない奴。

都市伝説の格好をした人。

状況が分かっていると思われる人物。

そして何より、

己の服を剥ぎ取り、今の服装を着せた人間。

だと思われる人。

少年は思考する。

まだ初体験も済ませていないと思われる己にとっては、あまりにも過酷な事柄であるため、最大の重要案件……では無いにしても、確実に重大なことであり、この後の身に起こることの一端を垣間見ることができる可能性があり、かつ、精神的苦痛を、かつ、身体を……。

もういいや、どうにでもなれ。メンドクサイ。

もうどんな道に進まされようとも別に……。

諦めが……。つくはずもないけれども、そうなるならば甘んじで受け入れようではないかっ!!

別に食われる訳でもあるまいし。いや……。食われるんだけど、性的な意味で。

男。

「倒れていたところを保健室に女の子に運んでもらって、目が覚めるとそこには、巨乳でメガネで白衣を着たおねえさまの顔が……。みたいなエロゲー展開には殺してでもさせてやんねえ。」

と、一言。

普通に、容姿のままの男の声で。

さて、何を理解できただろうか。

まず、この男、理解不能。脳内不明。意味不詳。

あつ、あと、性別、男。

よし、完璧だな。

少年。

「あの……誰ですか？」

少年は『ルーク』と名乗り、男は『ヲタ』と名乗った。

つか、そのまま名前かよっ！！！！

捻りも何もねえっ！

要約するに。

どうやら、彼が治療をしてくれたらしい。なかなか腕は見事なようだ。

重要な事柄であったこと。着衣の件だが、少女『彩華』が引きずって帰ってきたために縫合部分で服が分解されていたため、脱がすというより、初めから来ていない状態に近かったらしい。ズボンと靴に至ってもひどい有様だった。ボロ雑巾だった。（未使用）

涙が出てしまったような気がした。

体裁が守れて安心してしまったのだろうか。

そんな様子を見てか。

ヲタは行動した。彼が落ち込んでしまっていると判断したからなのだろう。

「ルーク氏……これ見ろお……」

手に人形フィギュアを載せていた。

「こ……これは……」

「何に見えるお？」

ああ。なんと。素晴らしい。

なんとといってもこの胸。大きいわけでもなく小さいわけでもなく。ただ適切な形、そして美しい形をとっている。おっぱいの形の中で

も至高とされr・・・おしりの形もm・・・・。そしてなにより、この頭に付いている2本の角がアクセントになり、隠す部分の少ない布切れがエロスを雰囲気を醸し出し、俺の萌えポイントを見事に・・・・・・・・。って何言わすんじゃい!!!!

冷静になれ、俺っ!!

「えっと。フィギュアですか？」

「うん。これ、見る人によって変わるよ。で、何に見えたお？」

「えっと・・・鬼の女の子・・・ですかね。」

「キミゝなかなかマニアックな趣味してますなゝ」満悦の笑になる。

「えっ!？」

「これ、見た人の萌えポイントを全て付けるように作ってあるんよねえゝ。」

勿論しゃべるんだけどゝちょっと待ってt——」

「おい待てやつ!!!」うわ、つい素が・・・・。

「いや、だって、中身と外見とのギャップが一番ポイントとしてt

」

「いや、いやいやいやいやいや。」これ以上趣味が漏れるのは不味い。下手したら性癖まで・・・・。

「大丈夫だ、問題ない。」

ヲタは手を握り、親指を立ててる。効果音をつけるならば『グツ!!!』である。

まずい。ここは一気に話題を変えなければ死線を越えることになるっ!!!（社会的に死ぬ境界線を）

「あの、話が変わるのですが、ここはどこですか？」

「ここはねえゝ。ボクたちの家だお？」

あの少女と一緒に住んでいるのか？
だとしたら・・・・。

まあいい。制裁は後回しだ。

「そうなんですか。」

ところで今、何時何分ぐらいかわかりますか？」

よし、話の流れが変わった。多少強引だったかもしれないが。

どうやら朝5時を過ぎた頃らしい。

時計があるのか、こんなところでも。

お腹が空いているだろうと板チョコレートを持ってきてくれた。
何かと気を使わせてしまっている。

この男はなかなかいい人らしい。

チョコレートは少量でエネルギーを得ることができる食べ物であるため、ちょうどよいと思ったのだろう。本当にいい奴だと思う。
素晴らしいチョコイスだ。

だがな、持ってきてくれたチョコレートが赤い。なにこれ。
つか、赤いチョコレートってなんだよ。

赤だぜ？真赤だぜ？赤以外の混じりつけ0%の純粋な色だぜ？この色、血の色だぜ？

てか血じゃね？これ？

そう考えると鉄の臭いがしている気がしてきた……。
いや、間違いなく香りを放っている。

ヲタ曰く。「赤いのは気のせいだ。味も問題ない。ハズ」
だそうだ。

なにそれ、めっちゃ怖い。

結果として、何も問題はなかった。

味も食感もチョコレートその物で、別に……気になることもなかったと思いたい。

少し血の味がしたような気がしたぐらいである。

ヲタは、無事食べ終わったのを見て、「食べても大丈夫だったのか」などと呟いていたが気のせいだろう。奴はいい奴のはずだ。そうでなくてはならない。トラウマになるだろ？ 違うなら。

傷の方は問題なく、今からでも動けるそうだ。

一応、トイレの場所（隣の部屋）と食事を取る時間（8時ごろ、呼びに来てくれるらしい）を聞き、もう一度寝ることにした。あのチョコレートを食べてから無性に眠い。食べたせいで緊張が緩んだのだろう。横になるとすぐに意識は落ちた。

これで、ここに来た一日目が終わる。

体裁死守（後書き）

コメントありがとうございました。

大学生にもなって課題に追われることになるとは・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1576ba/>

蒼と朱と外れた歯車

2012年1月10日01時48分発行